学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１２年６月２日
文責：ＪＵＮ

学び合う授業で学び合う教室は生まれるか？

教師が学び合う授業に取り組んでいれば、その教室は子どもたちが学び合う教室になるはずです。けれども、そうなっていない場合がかなりあるのです。それはどうしてでしょうか。ちなみに、学び合う教室とは、授業はもちろんさまざまな場面で、聴き合い、かかわり合うことが特別なことではなく平常のこととなっている教室です。

１．　授業という枠でしか考えない愚

学び合う授業を目指す教師は、どんなことを考え、どんな手だてをとり、何を理想像として描いているのでしょうか。そう考えると、それは授業という枠を一歩も出ていないことに気がつくのではないでしょうか。つまり、教師は、学び合いというものを授業という枠の中でしか考えていないことが多いのです。

もちろん、学び合いは学びが生まれる授業時間で培われます。授業時間外の、たとえば清掃時間とか、給食時間とか、外遊びをする時間とか、そういった時間よりもやはり授業時間において学び合いは実践され、学び合うかかわりが醸成されます。ですから、教師の意識が授業に向くのは当然といえば当然です。

子どもがかかわり合い、支え合って、すべての子どもが安心して学べる授業が実現すれば、その体質は授業時間外へもつながるはずです。授業において、学び合う心地よさ、学び合う喜びを味わった子どもは、授業時間外における互いのかかわりでも、ごく自然にそういうかかわりを求めるようになるはずだからです。

そうなったとき、その教室は、すべての子どもが安心して生活する場になることでしょう。そして、子どもたちの心とからだに、人とともに生きる感覚のようなものが根づくことでしょう。

実は、「学び合う学び」は、子どもの学力向上のためだけに行うわけではないのです。もちろん学力が高まること、学びが深まることは目指さなければなりません。けれども、それが実現されるその先に、ともに生きられる子どもたちの未来が広がっているのです。

教師は、たとえ授業時間における学び合いを目指すとしても、その目は、もっと広く、もっと遠い、子どもたちが人として生きるその先を見ていなければならないのです。その視線のない教師の下では、学び合う教室は生まれにくいのかもしれません。

２．　よい授業を求める愚

教師は、よい授業に対する憧れからなかなか脱することができません。これも、学び合う教室、つながり合うかかわりのある教室を生み出せない一つの要因です。

その１時間を見ごたえのある「よい授業」にしたいという意欲は教師としてよく理解できます。しかし、そのことにより、もっとも大切なことが見えなくなる恐れがあるのです。

「よい授業」という場合、それは教師が描く「よい授業」になりがちなのです。学ぶのは子どもなのに、子どもがどう考えて、どう探り当てていくのかという、子どもに寄り添う見方をしないで、自分の想定する手順に当てはめるような授業にしてしまう危険性が高いのです。たくさんの学校で、たくさんの教師の授業を見ていると、教師はどうして子どもの気持ちになれないのだろう、子どもの考え方を知ろうとしないのだろう、どうして自分の側からしか考えないのだろうとかなしくなることがあります。

とは言っても、「学び合う学び」を目指す教師なら、そんなことはないだろうと言われそうです。でも、現実には、「学び合う学び」を目指す教師でさえその傾向から避け切れていないのです。それほど「よい授業」という魔力は教師をとりこにしています。

よい授業を目指すと、いつの間にか、こうしたい、こうでなければならないと考えるようになります。そのエアポケットにはまった教師は、それが子ども不在の危険なエアポケットだということがいつの間にかわからなくなります。こうして、教師は、その４５分、５０分を自分の満足できる「よい授業」にすることだけに夢中になるのです。

これでは学び合う教室は育ちません。どういう授業を実現するかという狭い考え方に陥っているからです。そうではなく、一つひとつの授業経験の連鎖と蓄積によって、子どもの心とからだに「学び合う」体質が醸成されるべきなのです。それには、そういうことだという認識が教師になければなりません。その認識のある教師は、目先の１時間を「よい授業」にしようという発想には陥らないはずです。そこに存在する考え方は、学び合うかかわりを培おう、学び合いで生まれる子どもの考えをもとに学びを深めよう、そのことにより、他者と学び合うことがどんなに素敵なことなのか、どんなにうれしいものなのか、そういう感慨が生まれるようにしよう、そういうものになるはずです。それは、「よい授業」を目指すものとはある意味対極にある、子どもの「よい学び」を目指す営みになるはずです。

よい授業を目指すのではなく、子どものよい学びを目指す、この発想の転換は、かなり重要です。

３．　学び合いを授業方法だと考えることの愚

教師ほどやり方と形にこだわり、それを求める職業人はいないのではないか、そういう思いになることがたびたびあります。そういうとき、子どもたちを一年間という短いスパ

ンで担当することになる教師の仕事の特殊性を考えるとある意味やむを得ないのではと思ってしまいます。早く結果を出さなければいけないため、つい手近にあるやり方・方法に飛びつくことになってしまうからです。しかしその一方で、その繰り返しでは、本物の「学び」は生まれず、子どもの学ぶ喜びを生み出せないことは確かで、そう思うと暗い気持ちになります。

やり方と形に汚染されている日々の授業について、それがどんなに問題なのか、それがどんなに子どもの学びを低くしているか、そのことに教師はあまり気がついていないと感じることがあります。そういう人は、何の疑いもなく、そのやり方と形を踏襲しているのです。さらによくないのは、そんな中身のない外見だけのやり方に憧れ、自分の授業もそうなるようにしようと積極的に取り入れてしまっている人までいることです。

そういう中身のないやり方や形を、子どもたちはどう受け止めているのでしょうか。実は、それが中身のないものであり、ほとんど魅力のないやり方だということは、子どもがいちばんわかっているのです。日々、それをさせられているのですから。もちろんそういう明確な自覚はないでしょうが、なんとなく肌感覚で感じているのです。だから、学びが深まらないし、本当の意欲も出ないのです。

そういう状態で、教師が「学び合い」だと考えるやり方を子どもたちにやらせたとしましょう。教師の指導ですから、子どもはそのようにするでしょう。教師の指導が強ければ強いほどそのやり方の形は整います。こうして外見的には、学び合いらしき状態は形作られます。

しかし、そこに本質的な意味がない場合は、授業が終わればそれはそれでおしまいになります。つまり、子どものからだの中に、「学び合う」魅力と感覚は残らないのです。子どもは、それは授業だけのこととして受け入れているのですから。学び合う教室は、やり方と形だけの授業では生まれることきないのです。

４．　学び合いを体験していないことの愚

他者とともに学び合うことの魅力は、体験したことのある者にしか本当にはわかりません。わからなくて困り果てているときそのわからなさに寄り添ってもらった学び合いの体験、何人かの人との聴き合いによって、こうだと思い込んでいたこととは異なる魅力的な考えを発見した体験、もっと言えば打ちひしがれるほど落ち込んだときにそっとそばにいてくれたり、支離滅裂な話をきいてもらったりした体験、そういう体験の数々が、学び合うことの魅力と大切さをしんからわたしたちに伝えてくれます。

だとすると、学び合いのある教室をつくろうとする教師こそが、その学び合いを体験していなければなりません。自分が、やってもいないことは本当には子どもに伝えられないからです。

とは言っても、大人になった教師がもう一度学び合う教室の一員になることはできません。そういうことではなく、わたしが言いたいのは、大人である教師自身が、現在進行形

で学び合いを体験していることが大切だということなのです。

教師が体験すべき「学び合い」、それは、授業づくりという教師の仕事を全うする上での学び合いです。これは、これまでにも何度も言っていることですが、教師の仕事は極めて複雑なものです。そして、その自分の教師としてのありようは自分では見えにくいものです。だからこそ、他者の目で、自分の教師としてのありようを指摘してもらい振り返ること、そして、他者のありようを見つめ学ぶこと、それが欠かせないのです。つまり、教師は、教師としての学び合いを実行していることが重要なのです。

それは、あるときには痛みを伴うものになり、あるときには自己嫌悪の渦中で苦しむことにもなります。けれども、教師の専門性は、それを避けては磨いてはいけません。そのある意味しんどい教師としての学び合いを支えてくれるのは、子どもとのふれあいであり、教師同士の支え合いです。そういう意味で教師は、子どもとの温かな関係を築くこととともに、教師同士の学び合う関係を大切にしなければなりません。

仕事を通して学び合う「同僚性」、さまざまに支え合える「研究仲間」が一人ひとりの教師に存在することで、教師は、「学び合い」を実際に体験できます。そうすれば、その喜びも、大切さも、そしてそれを実行するための大切なことも、心から獲得することができます。

学び合う体験をしていない教師には、学び合う教室はつくれないのです。他者に開かれていない教師は、他者に開き合う学び合う教室は育てられないのです。

わたしは、「学び合う授業」という言い方をせず、「学び合う学び」という言い方をしていることは、かなり広く知られるようになりました。しかし、それは、「学び合い」を授業のことだけに限定しないという意味合いもあって「授業」ではなく「学び」と言うことにしているということについては、まだまだ伝え切れていないと思っています。

わたしが思い描いている学び合いは、子どものからだに沁み込み、子どもがさまざまな場で他者とともに実行できる学び合いです。そのために、子どもたちがつどう教室が「学び合う教室」にならなければならないと考えています。

学び合う教室は、しっとりと落ち着いています。おだやかさと、慎み深さが感じられます。それは、他者を受け入れること、他者の尊厳を大切にすることが大事にされているからです。そして、行為としては、他者の声を受け止める「聴くこと」が、すべての子どもによって実行されているからです。

全国の多くの教室が「学び合う教室」になるように、わたしの思いはその１点です。そのため、きょうもまた各地の学校の教室を訪れています。